

存在感のある人である。けれどもこちらが構えてしまうことなく、すつと自然体で入っていける懐の深さもある。サルトの評価というのはセンスのよさはもちろんだが、「懐の深さ」によるところも大きいに違いない。

イタリアのロー

マを拠点に、パリや中近東など世界中の顧客から愛されるガエターノ・アロイジオ氏。氏に会って、そんなことを感じた。22歳でサルトリア界の勲章「金のはさみ賞」を受賞し、天才と謳われる42歳である。この日は「マローネ(栗)」色の

のチヨークストライプスーツに、レンガ色のタイで登場。その新鮮な色の魅力も重なって、ひととき印象的だった。「チヨークストライプは誰もが着こなすスーツですが、マローネ色にすることで个性的に変化します。茶系がトレンドとして戻ってきていますが、英国風のクラシクな

スタイルを個人的に色や形でアレンジしたスーツは、今いちばんエレガントだと思います」

個人的といってもアロイジオ氏の場合は、ナポリスタイルのように過度に誇張することをしない。あくまで控えめな個性。とくにジャケットの襟、首まわりから肩にかけてのシルエットは、独自の感性が光る。肩に威厳を漂わせながらも、首にびったり吸い付く自然なシルエットや、襟先のさり気ない華やかさは、アロイジオ氏自身も意識している彼のスーツの特徴である。

「真のエレガンスとは、ナチュラルな立ち居振る舞いであると思っています。そのためにお客様の動作やくせを、しっかり見極めたうえでスーツを仕立てます。そして万人のための一着ではなく、たったひとりのためだけの一着であると感じられるフィット感や個性を大事にしたいのです」

エレガントな男の理想像を具体的にと尋ねると、ゲイリー・クーパーやケリー・グラントといった名前が挙がった。「今度の秋冬スーツは、1930年代のシネマ俳優のイメージでデザインしています。当時流行ったグレンチェックやチヨークストライプなどをキザっぽく、ね。私は映画が大好きで、ローマにもかつてチネチッタ(映画撮影所)があ

ったことを誇りに思っています。30〜50年代はモノクロ映画も多かったのですが、だからこそラインやシルエットが際立っていて参考になります。映画を観ながら、このスーツは何色だったのかと想像することもしばしばです」

そんなアロイジオ氏に、あなたの仕事はまるで映画監督のようでもありますね、と尋ねてみた。

「お客様に喜ばれるためにもの作りをするのは、たしかに監督のようかもしれませんが、似合いのスーツを明確にイメージすることもできません。が、同時に私は俳優でもあります。お客様の個性を理解するために、自らお客様自身になり代わってどう着こなしたいか想像しながら作ることも大切なことです」

### Gaetano Aronio

ガエターノ・アロイジオ  
1963年カラブリア生まれ。  
ミラノで修行をしたのちローマに移って独立。修行中、22歳で「金のはさみ賞」を受賞。現在はパリとローマにアトリエを持ち、パリには毎週通っている。左：東京銀座・ザ ソプリンハウスでのオーダー会では、アロイジオ氏の「金の手」による採寸も行われた。スーツの価格は60万円から。次回は9月に来日予定。



## ローマの俊英サルトの 金のはさみが生むドラマ

東シチヨ=文 DYSK=写真  
text by Michiyo Azuma photographs by DYSK

